

## 要旨

### I 目的

本研究の目的は、長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者の体験から、彼らの「生を支える力」について明らかにすることである。

### II 対象および方法

本研究は、長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者の語りから、彼らの「生を支える力」について明らかにする現象学的アプローチを用いた質的研究である。

研究協力者は、初回がん診断時の診断名が大腸がんであり、診断されてから 5 年以上経過し再発経験のある者で、今までに手術療法、化学療法、放射線療法のいずれか 1 つ、あるいは複数の治療法を組み合わせで行った経験のある現在外来通院をしている者としていた。一人の研究協力者に対して 1 回約 60 分、約 3 回の半構成的面接を行い、データ収集を行った。Heidegger を理論前提とし、Colaizzi の分析方法に基づいて分析を行った。

### III 結果

研究協力者 4 名の語りから分析を行った結果、長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者は、「生を支える力」を発揮して前向きに生きていた。その「生を支える力」は、これまで大事にしてきたものを継続させながら生きようとする「発症前から大事にしていた日常を継続させる」という要素、がんによりもたらされた不都合を自身で前向きにコントロールしようとする「自己コントロールしよう前向きに努力する」という要素、がんと共にある新たな自分の生きる意味を見出し、今を大切に生きようとする「今を精一杯生きる」という 3 つの要素を内包していた。また本研究で「生を支える力」を明らかにしていく中で、もう一つ見出された再発大腸がん患者の生き方があった。それは Heidegger(1927)が述べた人間が生きる上で行っているという「被投的企投」のように、自分の新たな可能性を模索しながら未来に向かって前向きに懸命に生きていたということである。

### IV 結論

長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者は、幾度となく辛い体験をする中でも、「生を支える力」を発揮して生きており、その「生を支える力」は、「発症前から大事にしていた日常を継続させる」、「自己コントロールしよう前向きに努力する」、「今を精一杯生きる」という 3 要素を内包していた。また彼らは、「生を支える力」を発揮し生きる中で、これからの自分の新たな可能性にめがけて懸命に生きていた。